

# 『今様十二月繪抄』 - 翻刻と解題 -

前 田 桂 子

## “Imayou Juunigatsu Esyou”・Republication and Commentary・

Keiko MAEDA

本書は稿者が所蔵する近世の絵草子（小本一冊、十丁）で外題に『今様十二月繪抄』とあるが、『国書総目録』に同名の記載はない。表紙より、絵は歌川芳虎、出版社は甘泉堂と分かる。一方で、裏表紙には「書肆 江戸よし町」（虫損）橋角 山本平吉梓」と書かれ、同ページの上部に「栄久堂刊行蔵板書目」として、「永花百人一首文十抄」、「源氏五十四帖」など四種の書物の広告がある。表紙と裏表紙見返しの版元が異なり矛盾しているが、紙面の状態から、裏表紙は別本のを補修してとじ合わせたらしく、虫損による痛みが本文と合わない。実はこのページと全く同じ版で刷られたと思われる『みめより草紙』（後編）という笠亭仙果著、版元山本平吉で弘化四年（1847）に出版されたものがある。本書の破損部分はこれによりほぼ明らかとなり、版元の所在地も「江戸よし町おやぢ橋角」ということが判明した。

ところで挿絵は、本文末尾より一勇齋国芳画と分かる。これも表紙の記述と矛盾するようであるが、国芳と芳虎は師弟関係にあるので特に珍しいことではないようである。さらに、本文二丁裏に描かれた幟にある「いつみや」という文字、三丁表の「泉市」はともに国芳、芳虎ともに交流のあった版元の異名である。表紙に明記されていた「甘泉堂」は別名「和泉屋市兵衛」、「泉市」と名乗っていたことから、表紙と本文の間に齟齬はない。以上の事と本文の内容から本書の題名は『今様十二月繪抄』で間違いないと考えた。元々あったはずの著者などの情報を記した刊記および裏表紙は紛失して素性が明らかではないが、絵師が一勇齋國芳（1797～1861）であること、表紙の絵がその弟子の芳虎（国會図書館の古典籍データベースでは1850～1881年の出版物が確認できる）であることを考えると、成立年代は1850年から1860年あたりであると推定できる。

内容は、「銀座の国次の風」(正月)、「大江戸」(二月)、「舟月の雛人形」(三月)などの江戸名物や、釈迦の誕生日を祝う風習(四月)、端午の節句の柏餅や菖蒲打ちの風習(五月)など、各月の年中行事の紹介である。挿絵はすべて子どもが描かれ、江戸のガイドブック的な意味合いを持ったと思われる。また、現代においては当時の文化史的資料となる。この書には各ページの匡郭の上に「三州吉良横須賀 大嶋屋」という壺型の印章が十か所認められた。「三州吉良横須賀」とは、現在の愛知県西尾市吉良町横須賀に当たり、大嶋屋は貸本屋ではないだろうか。三州(三河の国)の隣の尾張では大野屋惣八が日本一大きな貸本屋「大惣」を営むなど、かの地にあつて貸本屋が多数営業していたことが、長友千代治(注3)からわかる。本書は未翻刻である。

#### 【凡例】

翻刻にあたって、次の方針をとった。

- \* 漢字は常用漢字を用い、仮名は現行の文字に改めた。
- \* 原本にある振り仮名はそのまま記し、読みの便宜のために私に施した振り仮名は( )に入れて区別した。
- \* 翻刻は本文のみとし、画中詞は一部省略した。改行は原本に従ったが、散らし書きの部分はまとめたところがある。
- \* 翻刻の文章は原本が合印などで指し示す順に配置し、適宜丁数を( )に括つて示した。
- \* 翻刻の下方に、語釈を示し、対象となった語には本文に傍線を施した。

#### 【翻刻】

いちねん はかりごと くはんじつ  
一年の計は元日にありとは  
かね いっすんのひ  
兼てしれど一寸延れば  
ひろ おほみそか  
廣やかな大晦日の  
(朝) あしたとなればまた  
き ひんごうやうじに  
気のゆるむ人心奴風  
あじとも  
の足と俱にぶらり  
く と日を送るうち  
いっしかく陰矢の催  
そくせつ き  
足節季候の跡より  
あこ  
掛取さつさとござるゆ糸X  
かけとり

Xやりはこの遣かねて  
せつぶんおに  
節分鬼より  
そのみうち  
其身内に  
すは  
居りかねる  
これ常の心  
つね  
がけに  
あれば

#### 【語釈】

節季候…せきざるとも。  
年末の借金取り。

やりは「…一つの羽子を  
二人以上で突きあつこ  
と。二人以上では  
ねつき。おいばね。や  
りばね。

あさゆが  
朝夕  
おこたり  
なく  
勤<sup>つとめ</sup>  
給へ  
かし<sup>(一オ)</sup>

正月は<sup>(一年)</sup>  
ひと<sup>一</sup>せの  
はじめにして<sup>(一端来福)</sup>  
いちやうらい<sup>(種)</sup>  
ふくするなれば<sup>(種)</sup>  
しゆ<sup>ゆ</sup>のことはじ  
めあるなりこどもは<sup>(去年)</sup>  
こそ<sup>去年</sup>のうちより  
正月をまちて  
さま<sup>(風)</sup>のあそびなす  
たこをあげ<sup>(羽)</sup>  
はねをつき  
手まりをつた  
おもしろくうたひて<sup>(打)</sup>  
うつをとるなり<sup>(獅子舞)</sup>  
又し<sup>(猿)</sup>まひ万才<sup>(猿)</sup>  
さるひき

一陽来復：冬が去り春が  
来ること。新年が来る  
こと。

猿曳：猿に種々の芸を教  
えこみ、これを演じさ  
せて金銭をもらいうけ  
るもの。すでに鎌倉時  
代からみられる。猿ま  
わし。

とりおひ<sup>(鳥追)</sup>など  
きたり<sup>(春)</sup>あらたまの<sup>(新玉)</sup>  
はるをことぶく<sup>(考)</sup>

(二オ)

「あれまた<sup>(羽)</sup>  
はねが<sup>(羽)</sup>  
かざり<sup>(飾)</sup>へ  
かゝつた  
よ<sup>(小機)</sup>  
こそ<sup>小機</sup>う  
はやく  
とつて  
くんな  
じれつ  
たい  
のう  
「サア  
これで  
いゝか  
はやく  
たぐん  
ねへ  
此たこ  
は  
ぎんざ<sup>(銀座)</sup>  
の  
くに<sup>(國)</sup>  
つぐ<sup>(次)</sup>の  
所で

鳥追い：門付(かどづけ)  
芸の一つ。江戸時代、  
新年に女太夫が新服に  
日和下駄、編笠姿で、  
三味線をひき鳥追歌を  
うたつて人家の門に立  
ち米銭を乞うたもの。

國次：歌川國次

(1800 - 1861)

江戸時代後期の浮世絵  
師。寛政十二年生まれ。  
初代歌川豊国にまな  
ぶ。江戸銀座に住み、  
文化頃風絵で名を馳せ  
た。風絵の元祖と言わ  
れる。

かつた<sup>(書)</sup> か  
どおり  
で  
いと  
思つた  
(二才)

二月はきさらぎ<sup>(如月)</sup>  
ともいふてはじめの<sup>(午)</sup>  
むまの日はしよ<sup>(所々)</sup>  
いなりまつりを<sup>(稲荷)</sup>  
するなり  
なかんづく  
大江戸は  
八千八丁の  
つぢ<sup>(づ)</sup>  
うら<sup>(う)</sup>に  
いなりの<sup>(社)</sup>  
やしるなき  
所なくその<sup>(屋敷方)</sup>  
ほかやしきかた  
(三才)

又は太郎  
のいなり  
諸方<sup>(夜宮)</sup>にあり  
てよみやより

八千八丁…不詳。八百八  
町に同じか。  
太郎稲荷…太郎稲荷神社  
は、柳川藩立花家の屋  
敷(浅草下谷)にあつ  
た神社であり、同じく  
西町太郎稲荷(浅草鳥  
越)もあつた。  
よみや【夜宮・宵宮】…  
祭礼で本祭の前日の夜  
に行なわれる小祭。宵  
まつり。よいみや。よ  
みやまつり。

かぐら所<sup>(神楽)</sup>をたて  
そのほかかざり  
ものあん<sup>(行)</sup>  
どうを<sup>(灯)</sup>  
いだし<sup>(馬)</sup>  
にぎはひ  
いはん  
かた  
なし

故人の句に  
初午や  
桑どは  
ひと木も  
森の  
かづ  
(二ウ)  
(三才)

三月はやよひのさくら<sup>(翁生)</sup>  
つきにてもゝのせつくは<sup>(稲荷)</sup>  
ひいなまつりをなす  
玉さん舟月の人形  
美をつくして  
こしらへたるを<sup>(白濁)</sup>  
かさりしろさけ  
はまぐりそのほか<sup>(種)</sup>  
しゆ<sup>(種)</sup>のものを

玉山、舟月…江戸後期の  
古今雛の三人人のうち  
の二人。川端玉山と原  
舟月。あと一人は仲秀  
英。

そなへまつる  
これおほうち(大内)のまなひ  
をんな(家)の子もちたるい糸は  
なをさら(初節句)はつ(初節句)のせつくとて  
くさ(草餅)もちをひしにつくりて  
これをくはるなり  
(四才)

「わたくしは  
五人ばやし  
より

とふぞ  
おどふぐ  
をたん

と  
かつて

もら

たい  
い  
よ

「あ  
な(業)ひ  
ひら(平)

の

にん  
ぎやう  
は

(三ウ)

大内：大内雛の略称。雛  
人形(一種)の一種。天皇・皇  
后の姿をかたどつて作  
つた男女二揃いの人  
形。おおうち。内裏雛。

なりひら：在原業平によ  
うな美男子の容姿。

まことに  
きれいで  
ござり  
ます  
へね  
(四才)

四月は  
うづき(卯月)  
とも  
いふて  
うの  
はなを  
もて  
四月  
八日  
(四ウ)

し(釈)や  
か(迦)  
たん(誕)  
し(生)やう  
とて  
はな(花)  
み(御)どう  
をつくり

花御堂：四月八日の灌仏  
会（かんぶつえ）のと  
き、釈迦の誕生の立像  
を安置し、種々の花で  
屋根を葺（ふ）き飾つ  
た小さな堂。花の堂。

やくたう<sup>(薬湯)</sup>  
をたき<sup>(俗)</sup>  
ぞくに<sup>(甘茶)</sup>  
あまちゃ<sup>(甘茶)</sup>  
といふて  
所々の<sup>(堂前)</sup>  
どうぜんに<sup>(参詣群集)</sup>  
これをなす<sup>(目)</sup>  
さんけいくんじゆ<sup>(洗)</sup>  
して  
あまちやをもとめ<sup>(服用)</sup>  
めをあらひまた  
ふくようす<sup>(服)</sup>  
「おしやか<sup>(釈迦)</sup>のたんじやう<sup>(誕生)</sup>」  
「あまちや」  
此つきは  
ほとゝ  
ぎす<sup>(暗)</sup>  
なき<sup>(暗)</sup>  
また<sup>(初)</sup>  
はつ<sup>(鯉)</sup>  
かつ<sup>(鯉)</sup>  
を  
を  
(四ウ)

甘茶…アマチャ、または  
アマチャヅルの葉を乾  
燥させて作ったあまい  
茶。四月八日の灌仏会  
(かんぶつえ)に、釈  
迦の像に注ぐ風習があ  
る。甘茶水。

初鯉…初夏のころ、いち  
早く漁獲して最初に市  
場に出た鯉。特に、江  
戸では、これを食べる  
ことを誇りとする風習  
があった。

しやう<sup>(賣)</sup>  
くはん<sup>(玩)</sup>  
なす<sup>(五才)</sup>  
五月はあやめのせつく<sup>(菖蒲)</sup>  
にてしやうぶ酒しやうぶ<sup>(菖蒲)</sup>  
ゆにいりて百ひやうをはらふ<sup>(湯)</sup>  
おとこの子のせつくなるゆへ<sup>(兜)</sup>  
のぼりをたてかぶと人形<sup>(菖蒲太刀)</sup>  
あやめだちをかざり<sup>(柏餅)</sup>  
かしはもちをくばる<sup>(粽)</sup>  
ちまきをいはふなり<sup>(祝)</sup>  
子どものうちより<sup>(菖蒲打)</sup>  
しやうぶうちをなして  
あそぶ  
「サア これから  
わきざしを  
もつてきて  
いくさこつこを  
しやう おれがよしつねだよ(六才)  
「おいらは  
きつもん<sup>(九紋)</sup>  
りやうに<sup>(龍)</sup>

菖蒲太刀…五月五日の端  
午の節句に子供が太刀  
代わりに腰にさした  
り、採物(とりもの)  
として手に持ったり、  
菖蒲打ちに用いたりし  
たショウブ。近世は木  
製となり、飾りものと  
しての金銀彩色のそり  
の深い木太刀をいう。  
しやうぶがたな。あや  
めだち。

義経…源義経  
九紋竜…水滸伝の英雄で  
正式名は史進。上半身  
に九匹の青竜を象った  
見事な刺青があるため  
こう呼ばれた。

ならア  
 「きうもん  
 りやう  
 より  
 よし  
 つね  
 より  
 いづち  
 ゑび蔵  
 が  
 つよい  
 ぜ  
 おいらは  
 しばら  
 く  
 だ  
 六月はみなつき  
 といふみそき  
 のはらひ  
 あり また  
 ざおんゑ  
 とて  
 こす  
 てん  
 わう

(五ウ)

(六オ)

海老蔵：歌舞伎役者、市  
 川海老蔵。荒事を得意  
 とした。  
 暫：江戸歌舞伎の市川家  
 の当たり狂言十八種で  
 ある「歌舞伎十八番」  
 の一つ。他に、鳴神、  
 不動、勧進帳、助六、  
 外郎売、矢の根、毛抜  
 などがある。  
 祇園会：神田明神の地主  
 神である祇園三社（天  
 王社三社）の祭祀。  
 牛頭天皇：素戔鳴尊の化  
 身とされ、祇園社の祭  
 神として祇園天神とも  
 いう。

(六ウ)

の  
 みこしを  
 いだし  
 これを  
 かつぎて  
 あつきを  
 のぞく  
 なかにも  
 ゑとは所く  
 てんわうのまつり  
 あり十五日は  
 ひよしさんわう  
 のさいれいにて  
 まちく  
 ほこを出し  
 なりもの  
 ひきもの  
 おどり  
 やたひ  
 いだす  
 けんぶつ  
 くんじゆ  
 おびたし  
 っよい  
 っよい  
 っよい

(七オ)

(六ウ)

日吉山王：日吉山王神  
 社。永田の馬場（現千  
 代田区永田町）にある  
 神社。徳川氏の産土神。  
 祭礼は六月十五日、天  
 下祭のひとつ。

「おみきしよだ  
(御神酒所)

さげろ (七才)

七月はふみづきといふ (文月)

六日の夜はたなばた (七夕)

まつりにてけんぎう (華牛)

しよくじよをまつり (織女)

さゝの糸たにたんさく (蛸)

をむすびさゝげまた (結)

おだまきにはりを (芋環)

そへてあぐるすどり (上)

をあらひきよめ (洗)

うたをかく (朝)

八月 はづき

ともいふ

此つきの

十五夜は

ひとゝせの

名月にて (遊)

月のさゆるを (歌)

しやうくはんし (歌)

うたじやうるりを (歌)

もよほし こゝろ

芋環…糸によつた麻を、  
中を空虚にし、丸く巻  
きつけたもの。おだま

浄瑠璃…三味線を伴奏樂  
器とする語り物の総  
称。

やすき人 (を)

あつめしゆ (酒)

桑んを (妻)

なす (菊)

九月はきく (月)

づきとも (節句)

きくのせつく (きく)

きくは四き (きく)

にあれども (きく)

九月をしゆん (菊)

とすきく酒 (菊)

きくなますを (祝)

いはふ そのほか (祝)

しよ (にさい (諸所))

れいあり (神田)

桑どはかんた (明神)

みやうじんの (祭)

まつり 美を (八ウ)

つくせり

十月はかみなづきといふ (神無月)

廿日の日はあきんど (商人) のいへ (家) にて

神田明神の祭：丑卯巳未  
酉亥年の隔年で施行さ  
れる神田明神の祭礼。  
六月の山王祭礼とともに  
天下祭と総称する。  
『江戸名所図会』には、  
「神田明神祭礼 隔年  
九月十五日に執り行  
ふ。氏子の町々より練  
物・車樂等を出だす。  
中にも、大江山凱陣・  
牛若丸奥州下り・朝鮮  
人來朝の学びなどは、  
ことに遠近に聞こえて  
その名高く、もつとも  
美觀たり。」とある。



あきなひがみとてゑひすかうをいはふ（商神）  
 神にそなへたるしなをいち（供）  
 かうきんの（講金）  
 直をいふてうりかひのまなびをなす（売買）  
 「千両」  
 「一万両」  
 十一月はしも（霜）  
 つきといふ  
 子どもの  
 いはひつき（髪置）  
 にてかみをき（袴着）  
 はかまぎを  
 いはふ此つき（月）  
 さんしばゐ（三芝居）  
 かほみせにて（顔見世）  
 やくしやいれかはり（役者）  
 のもんかんばんを（紋看板）  
 いだしかがり  
 ものをちやや（軒）  
 のきにつくり  
 にぎはひおび（腰）  
 たゝしまた  
 かんじんすまふ（勳進相摸）

（九才）

恵比寿講：十月二十に商  
 売繁盛を祈願して恵比  
 須を祭る行事。  
 髪置：幼児が頭髪を初め  
 てのばす時にする儀  
 式。  
 袴着：幼児から少年少女  
 に成長することを祝つ  
 て、初めて袴をつける  
 儀式。  
 三芝居：歌舞伎の中村  
 座、市村座、森田座の  
 こと。  
 紋看板：歌舞伎の顔見世  
 前に、役者の名を定紋  
 や役柄の下に書いて、  
 劇場の木戸前に出した  
 看板。  
 茶屋：劇場に付属して観  
 客の案内や幕間の休  
 憩・食事の世話をする  
 所。

のかうぎやう（興行）  
 ありてよの（夜）  
 うちより  
 けんぶつくんじゆ（昆物群集）  
 なす  
 「みやうにちは（明日）  
 はやうござり  
 ますぞ  
 いをのまつ  
 には（話）  
 を（腰）  
 どし  
 じゃ  
 ぞや  
 「あれさそんなに  
 ゆすぶると  
 たいこが（堤）  
 こはれる  
 から  
 そろかに  
 やん  
 ねへ  
 「おらアかつぎては  
 もういやだ  
 たゝきてに

（九ウ）

緋緘：鎧の威の一種。緋  
 に染めた革や組糸を用  
 いた威。また、その鎧  
 くないおどし。  
 そろかに：そろそろと静  
 かに。

なるから  
かはつて  
くんねへ  
(十才)

十二月はごく(極)  
げつとて(月)  
ひととせの(一年)  
くれにて(暮)  
せはしく(光)  
はるの事(春)  
をみな  
としの(年)  
うちに(内)  
したく  
なす  
せきぞろ(四季候)  
きたり(来)  
まつかざりを(松飾)  
なす所へせいぼう(歳暮)  
くばりくるやら(配)  
もちをつくやら  
せはしき事  
おびたし(影)

せきぞろ…(前出)  
粟：もちあわを蒸してつ  
いた餅。近世江戸郊外  
目黒不動堂で売ったも  
のが名物であつた。も  
とは本物の粟の餅であ  
つたが、享保(一七一  
六～三六)頃より、普  
通の餅を粟の色に染め  
たものとなつた。

「此(一白)ひとうすを  
あげたら  
あとは  
あはに  
しやせう  
とつて  
くれろ  
とよ  
めでたし／＼／＼／＼

からみもち…つきたての  
柔らかい餅を、しょうゆ  
をかけた大根おろしにま  
ぶしたもの。おろし餅。

一勇亭國芳画 (十ウ)

栄久堂刊行蔵板畧目  
(永花百人一首文十抄、源氏五十四帖などの広告有)

書肆 江戸よし町〃〃 (虫損) 橋角  
山本平吉梓

注

1 群馬大学総合情報メディアセンター・新田文庫所蔵

2 『原色浮世絵大百科事典』第三巻（大修館書店 一九八二年）  
によると以下の通りである。

和泉屋市兵衛 いずみやいちべえ

甘泉堂 泉市 江戸 芝明神前三島町太助店・惣八店

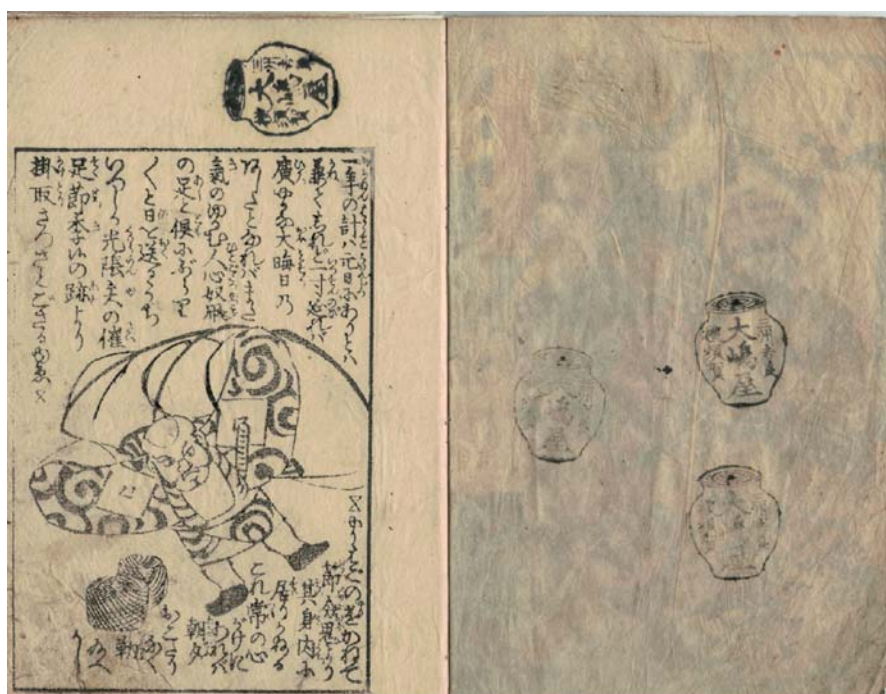
貞享<sup>一六八八</sup>〜明治前期 山中氏 絵本・草双紙・錦絵な

ど多くの作品を刊行した地本問屋の代表的版元

また、國芳は和泉屋市兵衛の版元から安政二年に「善悪道中出世寿古六」という双六を出している。

3 長友千代治『近世貸本屋の研究』（東京堂出版 一九八二年）

巻末の貸本屋蔵書印リストより、「三州」という地名が記された貸本屋がいくつも確認できる。一部を挙げると「三州高濱豆腐屋」、「三州吉田 九文字屋」、「三州養父 佐源」、「三州横須賀 鹿嶋屋重兵衛」などである。





二丁ウ、二丁オ



前田『今様十二月繪抄』

―翻刻と解題―

二丁ウ、三丁オ



二十九

三丁ウ、四丁オ



四丁ウ、五丁オ





五丁ウ、六丁オ



六丁ウ、七丁オ



七丁ウ、八丁オ



八丁ウ、九丁オ





九丁ウ、十丁オ



前田『今様十二月繪抄』

―翻刻と解題―

十丁ウ、裏表紙見返し



三十三